

3月8日 国際女性デー 11 回目となる歩く国際協力「Walk in Her Shoes 2022」が始まります



世界には、水汲みのために毎日歩かねばならない女性や女の子たちがたくさんいます。そんな「彼女たちの身になって歩く」シンプルで健康的なキャンペーン、歩く国際協力「Walk in Her Shoes 2022」が、今年も 3 月 8 日の国際女性デーから始まります。本キャンペーンは、日本を含む複数の CARE メンバー国が実施しているグローバルなもので、日本での開催は、今年で 11 回目を迎えます。10 周年の昨年度は、日本各地と海外から 2,200 名を超える多くの皆さまにご参加いただきました。

今年のキャンペーンでは、「500 歩につき 1 円」の歩数に応じた特別協賛企業からの寄付企画はもちろん、コロナ禍により 2 年間実施できずにいたオフラインでのチャリティーウォークイベントも、感染予防対策を十分に行いながら開催する方向で準備をしています。今年も、気軽に取り組める国際協力として、ぜひ多くの皆さまにご参加いただければうれしいです。国際女性デーから 3 か月間、皆さまと「彼女たちの身になって歩く」ことを、キャンペーン担当として、とても楽しみにしています。

(マーケティング部 神 裕子)

国際女性デー 2022 持続可能な明日に向けて、ジェンダー平等をいま 「ジェンダー平等がつくる明日」展を開催します

- 会期：2022 年 3 月 8 日（火）～ 同年 3 月 27 日（日）
11:00～18:00（休館日：毎週月曜日）
- 会場：ITOCHU SDGs STUDIO
東京都港区北青山 2-3-1 Itochu Garden B1F

今年の国際女性デーでは、「すべての人にとって、より持続可能な未来を築くため、気候変動への適応・緩和・対応策を主導している世界中の女性と女児の貢献を認識し評価する」ことがテーマに掲げられています。伊藤忠商事（株）の協力を得て、CARE の活動地でこのような貢献を行っている女性や女子の写真等を展示するイベントを開催します。お近くにお越しの際はぜひ足をお運びください。



編集後記



●年明けに、一時帰国中の伊藤と一緒に、活動報告会をオンラインで実施しました。関東圏のみならず、東北、中部、中国、九州地方など、これまでなかなかご参加が叶わなかった地域の方々とお会いすることができ、コロナ禍ならではの良さを感じました。これからも工夫して、活動の進捗をタイムリーにお伝えできればと思っています。(甲斐)

●長い長いコロナ禍のトンネルの中、日々の閉塞感を感じる一方で、法人支援者との「新しいつながり」の機会がたくさん生まれています。先日は、東ティモールの伊藤駐在員とともに、在インドネシア企業に対して Zoom 会議で支援を依頼する機会も。また、オンライン参加が主流の歩く国際協力「Walk in Her Shoes 2022」への参加企業は、延べ 56 社にも及びます！（高木）

個人支援者専用ダイヤル TEL:03-5499-9931

CARE アクションする



公益財団法人 ケア・インターナショナル ジャパン

〒171-0031 東京都豊島区目白2-2-1 目白カルチャービル5階
TEL:03-5950-1335 FAX:03-5950-1375
E-mail:info@careintjp.org Website:www.careintjp.org
Facebook:www.facebook.com/CAREJp Twitter:https://twitter.com.CAREJp

※小誌へのご意見、ご感想を募集しています。
発行元までお寄せ下さい。

※このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREの
デザインボランティアの会田ひとみ様のご協力により、制作されています。



CARE World

Vol.42 Newsletter February 2022



ケア・インターナショナル ジャパンは、世界 100 国以上で人道支援活動を行う国際 NGO ケア・インターナショナルの一員です。
災害時の緊急・復興支援や「女性や女子」の自立支援を通して、貧困のない社会を目指しています。

Contents

- page 1 最新のケア・インターナショナルを巡る動向
- page 2 東ティモール「農業用水改善事業」
- page 3 最新レポート
- page 4 歩く国際協力「Walk in Her Shoes 2022」
国際女性デー 2022 写真展示

新メンバーを迎え、新ビジョンの下、挑み続ける CARE

ケア・インターナショナルの正式メンバーとして新たに 2 か国の組織が参加

昨 2021 年 11 月、ケア・エジプトとケア・ルクセンブルグが正式にメンバー国として承認されました。エジプト ルクセンブルグ
両組織は、過去数年にわたり組織と事業の強化に取り組み、メンバー国として求められる基準を満たすと認められたものです。この結果、CARE の正式メンバーは、当財団を含めて 16 組織となり、組織としての多様性が一層高まるとともに、CARE 全体として途上国に対する支援体制が一段と強化されました。

CARE ビジョン 2030 とともに



CARE は、昨年度から、向こう 10 年間の新たな活動方針である「CARE ビジョン 2030」に基づき活動を行っています。このビジョンでは、コロナ禍における困難に対応し、また持続可能な開発目標 (SDGs) 達成への貢献を目指して、包摂性をより重視し、貧困をなくすとの目標の下、特にジェンダー平等の

推進を中核に据えています。

災害や紛争などの危機下においては、女性と女子がより困難な状況におかれ、その人権が危機に晒されることは過去の経験からも明らかです。全世界的にコロナ禍が収まらず、地域紛争や難民の発生が続き、また気候変動が深刻な今日の世界において、女性と女子へのフォーカスを中心とする CARE の役割は過去にも増して大きくなっています。

ケア・インターナショナル ジャパン 今年創立 35 周年の節目を迎え

CARE の成り立ちは第二次大戦直後に遡ります。戦後、戦争の被害が大きかった欧州の国々に米国の市民団体から緊急物資の詰まった「CARE パッケージ（ケア物資）」が届けられたことが CARE のルーツです。ケア物資は日本にも届き、およそ 1,000 万人の日本人が支援を受けました。今度は日本が世界に恩返しをと、1987 年 5 月、現在のケア・インターナショナル ジャパンが設立されました。私たちは、親や祖父母の世代が支援を受けたことに対する感謝を忘れることなく、その恩返しの気持ちとともに、日本自身の経済発展や社会的課題解決の経験を途上国に対する支援に活かしたいと考えています。

35 周年を迎える今年が、当財団にとり一層の飛躍の年となるよう役職員一同新たな気持ちで活動に取り組んで参ります。今後とも皆さまのご支援とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

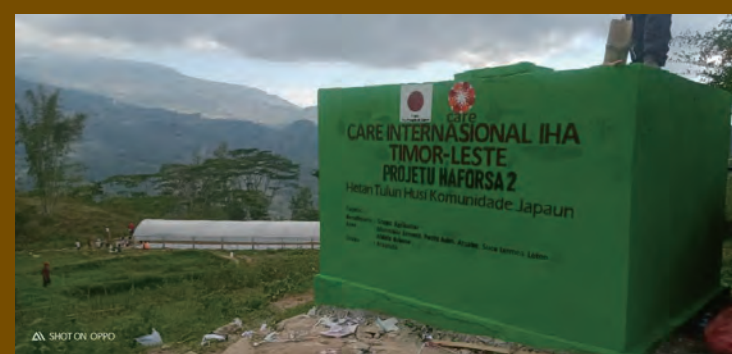
(事務局長 河崎 卓)



活動地域	エルメラ県アッサベ郡の4村落（12の農民グループ）
実施期間	2020年3月31日※ ～2023年12月31日（3年9か月間） ※うち、2020年3月31日～同年10月31日の約7か月間は新型コロナウイルス感染拡大に伴い活動休止
年間事業規模	22,551千円（2021年度支出額）
活動内容	貯水タンクや点滴灌漑設備などの設置、設備維持管理委員会の設置、ジェンダー平等研修の実施

この事業は、新型コロナウイルス感染拡大により事業開始が延期され、2021年1月によりやく活動が本格的に始動しました。この1年の活動の成果を教えてください。

1年目は、5つの集落を対象に活動しました。5つの農民グループにおいて、ビニールハウスや貯水タンクを含む点滴灌漑設備を設置し、年間を通して、野菜栽培ができる環境を整えました。その内、2つのグループが、野菜を収穫し、地元の小学校や市場で販売を始めることができました。また、レタスやトマトなど栽培経験のない野菜を育てるための技術等を習得するための農業研修や、長期にわたり適切に設備を維持管理するための研修を実施しました。さらに、男女の役割分担を見直して、女性がより農業活動に従事し、グループでリーダーシップを発揮できるようにジェンダー平等研修やリーダーシップ研修を実施しました。



実際に設置された貯水タンク。山頂に設置されたタンクから、高低差を利用して、山頂の湧き水が下方の農地に給水される仕組み。重力を利用するため環境にも優しい。タンクの側面にはジェンダー平等に向けたメッセージが書かれている。



採れたての新鮮なレタスを披露する農民グループのメンバーとスタッフ（伊藤は左から3番目）。とても瑞々しくておいしかったとは伊藤の談。

1年の活動を終えて、興味深い発見などありましたか。

	女性	男性	合計
★グループ1	14	7	21
グループ2	10	11	21
★グループ3	18	4	22
グループ4	10	10	20
グループ5	13	14	27
合計	65	46	111

表1：各農民グループのメンバー数と男女の内訳

まだ1年目を終えたばかりですが、5つの農民グループのうち、いち早く野菜を収穫し、販売にまで至ったのは、女性メンバーが多く、女性がリーダーを務めるグループでした（表1：グループ1と3）。フィールドスタッフへの聞き取りからわかったことは、メンバーたちが頻繁に畑に通って、野菜の世話をしたことが、収穫につながったということでした。

もちろん、この限られた事例で、「女性メンバーが多かったことや女性リーダーの存在が成功の要因」であったと結論付けることはできませんが、本事業では、農業用水設備の整備だけではなく、女性のリーダーシップの醸成にも力を入れていることから、今後、さらにグループメンバーへの聞き取りや野菜の販売実績などのデータを収集し、成功との関連性を探っていきたいと思っています。



コロナ禍で遅れた開始から1年。現地で事業統括を務める伊藤が活動の進捗をレポートします

設備維持管理委員会リーダーのレオノラさん。ビニールハウスは、竹など地元で調達できる資材を利用して作られています。

これからの活動の展望と課題を教えてください。

今、2年目の準備をしているところです。今年は、7つの集落を追加し、全部で12の集落で活動をする予定です。点滴灌漑設備は、設置から5年くらい経つと修理が必要となり、およそ15年で新しいものに取り換える必要があるといわれています。そのために、メンバーたちは資金を積み立てなくてはなりません。また、今は、種を支給していますが、将来的には、野菜の販売で得た収入から自分たちで種を購入していくことになります。よって、これからの活動を通じて、修繕費の集金と管理、そして野菜の収益の帳簿管理などに関する会計研修にも力を入れていく予定です。

また、1年目もそうでしたが、雨や村の行事など予期せぬ事由により、活動が実施できない時期が生じると予想されます。よって、当初の計画に縛られることなく、状況に応じて実施形態を変えて活動を進めていく必要もあります。さらに、一部、活発なメンバーが少ないグループもある中、今後、どのように働きかけて活性化を図るのかという課題も残されています。

最後に、支援者の皆さまへのメッセージをお願いします。

1年目は、コロナ禍に加えて、50年に一度といわれる豪雨が発生する緊急事態に見舞われました。さらに、フィールドでは、放し飼いにしているニワトリや犬がフェンスを乗り越え、野菜を食べたり、設備を壊したりというハプニングもありました。そのような中でも、点滴灌漑設備を設置したことにより、「毎日野菜に水をやる仕事が軽減されて、とてもうれしい」との声が女性メンバーから寄せられ、とても励みになっています。

また、アッサベ駐在のスタッフは、相当な悪路にもかかわらず日々車ではなくバイクを使って移動し、時に橋のない川を渡り、雨季には徒歩でしかたどり着けないような集落にまで1時間ほどかけて通うなど、幾重にも重なる困難にもめげず、献身的に事業に取り組んでいます。

引き続き、現場の様子や活動の進展をご報告していきますので、ぜひ皆さまのご支援をお願いいたします。



ニワトリに食べられ茎だけ残ったブロッコリー



伊藤（右端）やスタッフは背後にある川を歩いて渡って事業地に赴くことも



年に2～3回しか咲かないコーヒーの花に出会えたらラッキー